

『ペチュニアと黒のローファー』

五月雨で勉強漬けだった中学最後のゴールデンウィーク明け。放課後に俺は環境委員の仕事をしに校舎裏の花壇へ行った。昨日までの雨が嘘のような快晴、傾いた陽が熱く焼くコンクリートに、何故か黒いローファーが片足だけ落ちていた。

名前でも書いていれば、と拾い上げて間も無く

「あの・・・、それ私のです」

と後ろから少し恥ずかしそうな声が掛かった。振り向くと片手にローファーを持ち、運動靴を履いた一年生の女子が居た。学校指定のネイビーのセーラー服のタイが白い事が一年生の証である。俺は彼女に手にしたローファーを渡す。

「すみません、ありがとうございます」

明るく彼女はそれを受け取り、身を翻して去って行った。白いラインの入ったセーラーカラーがはためいた。ミディアムボブの黒髪が軽やかに揺れて、シャンプーの匂いがした。

六月下旬のとある昼休み、俺が花の世話をしに向かうと、筆入れを持った彼女が花壇の近くで三階にある一年生の教室に向かって手を振っていた。彼女がこちらに気付き、不意に目が合う。

「あ、こんにちは！」

「どうも」

反射的に返事は出来たが、急に話し掛けられて正直面食らってしまった。単に三年生である俺に挨拶したただけだろうが、明るく挨拶されると俺を覚えていてくれたのか等と考えてしまう。筆入れを持って何をしていたか分からないが、少なくとも悪戯ではないだろうと思う。

七月上旬のとある晴れた日、昼休みも終わる頃、草取りをしていたら花壇の近くに中履きが降って来た。「タイン」と小気味よく鳴り響いた靴底の音に吃驚してそちらを見たが、すぐ様三階の窓から「すみませーん！今友達が取りに行つてまーす！」と女子の声が聞こえ、間もなく彼女が取りに来た。

「つぶしばきして遊んでたら飛んでつちやいました」と笑っていた。

「この白い花、綺麗ですね」

「あ、ああ、ペチュニア」

「ペチュニア、名前は知らなかつたです」

急に花の話なんてお世辞かとも思ったが、笑顔で言われてしまうと疑念は逆に申し訳なくなる。それから彼女はスマホを取り出し、ペチュニアの写真を二枚程撮影し「それじゃ失礼します」と校舎に戻って行った。

2.

気が付けば昼休みか放課後に週に一回、週に二回と、会う回数が増えて行つた。靴だけでなく消しゴムや体操着など、投げて壊れない物ばかりが降ってくる。きつといつだったかの筆入れもそうなのだろう。自分が当番でない時も落ちた物を拾いに来ているのだろうか。そんな遊びが流行つているとしたら他の子を取りに来る事だつて有つても不思議ではないだろう。

俺に会う口実——というのはず無いとして、単なる遊びなら良いが、イジメの可能性も視野に入れなければならぬ。

「大丈夫かよ」

スクールバッグが降つてきた放課後、遂に訊いてしまった。いつかはそれとなく訊こうと思つていたがスクールバッグなんて大きな物が投げられたんだ、きつと今日がその日なのだと思つた。

「下まで運ぶより投げた方が早いって私が巫山戯て言い出してこの様ですよ、ははっ」

何が、とは訊かないんだな。自分がイジメられている自覚が有るのではないだろうか。悪巫山戯とイジメが紙一重だと伝えたら君はどんな顔をするだろう。惨めさを自覚させる様な真似はしたくない。不自然にならない様に俺は話を逸らした。

「いや、頭に降つて来たたら嫌だなと思つて」
「あはは、誰もそんなへましませんよ」



「花は潰さない様に言つとけよなあ」

「はい」

「夏休みもあいつらと遊ぶんだ？」

「どうだろ、塾とか有るから」

「意外」

「失礼な、弟が産まれる前はもつと沢山習い事してたんですよ？」

「ふうん」

親が教育熱心なのか、跡継ぎ問題なのか、人の家庭の話など余り突っ込むべきではないだろう。俺は彼女に野暮な奴だと思われたくはなかった。

「夏休み、あいつらと遊びたくないなら俺と遊ばないか？」

「え！何ですか？デートですか？」

「馬鹿言うな」

「友達が居ないとか？」

「そうだな、友達が居ないから花の世話をするのか花の世話をするから友達が居ないのか……ってオイッ」

「どっちもですわね」

ケラケラと笑う彼女が眩しかった。

イジメはどちらかが空気を読めていない時に起こると、何かで聞いた事がある。彼女はいつも明るく振る舞うから、相手も気付かないのかも知れない。彼女すら、イジメとして認めていない可能性もある。被害者意識の醜悪さを彼女は知っているのかも知れない。自分を憐れむまいと気丈に振る舞う彼女は俺が心配するまでもなく強い人間に見えた。

3.

結局、夏休みの終わりに半日だけ遊ぶ約束をした。

駅前まで待ち合わせた彼女は白いノースリーブのブラウスにデニムのショートパンツとコルクっぽい踵の上がついたサンダルを履いていた。セーラー服なんかより大人っぽくて、すっぴんではあったがとても18歳には見えなかった。

女子と二人で遊んだのは殆ど初めてと言っても過言でもない。端から上手くエスコート出来る気がしなかった俺は「何食べたい？」と訊いてみた。彼女は「あんまりお金無いのでファミレスでお願いします」そう言つて駅前のファミレスで昼食を取った。

彼女は食事をし終わっても尚ドリンクバーで粘り、家や塾の話をしてくれた。どうやら私立中学に入るだけであつて家自体は立派らしい。跡取り息子が生まれた事によつて彼女は沢山の習い事から解放された方がいいが親の愛情は弟に向き、お小遣いは同級生より少なく、放課後に遊びに誘われても時々しか参加出来ないらしい。彼女はそれを「申し訳なくなる」と零していた。これは彼女の口振りからの憶測だが、時間も金銭も不自由な彼女は、いじられキャラでしか友人としての価値を見い出せていない様だつた。そして両親にとつても、勉強を頑張る事しか自分には価値がないとすら思つてる様だつた。「そんな事はない」と言つてやりたいが、憶測に過ぎないからと思ひ留まつた。

それから大きめの公園の花祭りを見に行きたいと言ひ出したのでバスに乗つて向かつた。もしや俺が花好きだと思つてるのか訊くと「私が行きたかつただけですよう」と笑つていた。なんだ、我儘も言えるじゃないか、大抵こういうタイプは意思決定権を相手に委ねがちだと思つていた。俺は素直に可愛いと思つた。

「ていうか花、好きじゃないんですか？」

「んー、育てるのは好きになつた、かな」

「じゃあなんで環境委員会に？」

「たまにサボつてもバレないから」

デートみたいだなと思つた。言つたらきつと困つて笑つてくれるだろうから言わない。春には彼女と公園でたわいのない話をする事になるなんて思つてもいなかつた。あの時落ちていた黒いローファーは彼女にとつて嫌な思い出なのだろうか。あの日の様な夕陽に目が眩んだ。彼女はこれから塾が有るらしく、駅前で別れた。

自分の受験勉強も重なり夏休みに遊んだのはそれきりだつたけれど、俺はやはり彼女が好きなのだと思ひし

た。もし本当にイジメられているなら何か俺に出来る事はないだろうか。けれど、言ひ訳なんて積み上げてクラスどころか学年も違うし、自分も受験が有るし、口で言うのは簡単だ。けれど、言ひ訳なんて積み上げて

もどうしようもない。今思うと夏休みは花火大会だの海だの口実は沢山あつたのだから、もつと連れ出してやれば良かった。広い世界を見せてやりたかつた。

4.

九月一日、夏休み明け初日である。空は快晴、朝日が眩しい。花壇の水遣りの為に朝早く登校するとコンクリートの床に黒いローファーが落ちていた。デジャヴというヤツだ。彼女が取りに来たら何の話でしょう。教室にはギリギリに戻ればいいだろう。それにしてもこんな朝早くに珍しいな、そう思つたその時だつた。

花壇の中に何か落ちていた。君だった。噎せ返る様な花と鉄の匂いが鼻を突く。白いペチュニアと白い肌を君は赤く染めていた。俺は殆ど反射的に手を伸ばし、君を撫でた。涙は出なかった。

5.

——— 拜啓先輩へこの間はありがとう。ちよつとだけデートみたいで楽しかったです。大切な花壇を汚してごめんない。先輩が育てた花の中が良いなと思つたの。最期の我儘を許して下さい。先輩はちゃんと生きてね。先輩の中に私は存在し続けるんだから、私の分まで幸せになつてね。どうか神様、どうかお願いします。

神が本当に居るのなら、これは俺への罰なのだと思う。心のどこかで今日を予感していた気がするから。そんな悪い予感に蓋をして、彼女を信じてしまった。期待してしまった。手紙で俺を責めてくれたらどれ程俺は救われるだろう。手紙くらい明るくなくても良いんだ。愚痴くらい何時でも聞いてやる。助けを求めたって良い。赤子の様に泣いたつて、俺は幻滅なんてしないから。

君が居なくても世界は回る。君の居ない世界で生きていく。時間は君の記憶を薄れさせる。毎日悲しみに昏れる事もなくなる。それは同化している証だと、誰かが言った。俺の中に君が溶けていく。ペチュニアの匂いが君を呼び覚ます。

6.

本当は誰も悪くないよ。友達も先輩もお父さんもお母さんも弟も、みんな悪くない。私もきつと悪くないの。ただ私がたまたま男の子じゃなかったり、勉強が得意じゃなかったり、ヘラヘラ笑つて許しちゃつたり、それだけの事だよ。私死ぬのは、逃げたいからなのかな。疲れちゃつたのかな。後悔させたいのかな。それとも、みんなに覚えて欲しいのかな。ずつと上手く表現出来なかつた分、最期はちゃんとしよう。ちよつと楽しみになつてきた。

ねえ先輩、ペチユニアの花言葉は、先輩みたいで好きなんだ。

